

17 陸奥・出羽の国境 (山内黒沢)

秀衡街道は西和賀町栗郷を経て、陸奥・出羽の国境だった黒沢峠を越え、横手市山内黒沢に出る。黒沢の集落形成は古く縄文時代前期の越上遺跡、室町時代以降の黒沢館跡・黒沢古戦場・熊野山神社があり、当麻曼荼羅・百万遍念仏講も伝承されている。江戸時代には境口調役所が設置されていた。平和街道・国道107号線・秋田自動車道・JR北上線は、それぞれ黒沢地区を横断しているが、秀衡街道は縦断して山内南郷に向かう。



国境口(山内黒沢)

筏隊山神社前の秀衡街道



筏隊山神社



三十番神社の筏の大杉

19 西の守護神(山内筏)

道はやがて山内筏に至る。前九年・後三年両合戦の伝説を伝える城館遺跡、小野寺氏ゆかりの三十番神社(比叡山神社)、秋田県指定特別記念物「筏の大杉」が見られる。ここに鎮座する仙人権現社(今の筏隊山神社)は、「雪の出羽路」に「仙人峠」に鎮まる神霊を遷し奉った」とあるように、仙人権現(秀衡街道の東の守護神)から分祀された。それで、秀衡街道のシンボルとも言われる中尊寺ハスガ、この仙人権現社にも株分けされることになった。

18 古代郡郷制の村(山内南郷)

秀衡街道の経路は、山内黒沢の南の山間を抜けて、山内南郷に到達する。雨池遺跡・エコリ遺跡など遺跡が多く、修験系の金峰山神社も鎮まる南郷は、古代郡郷制下の村落に比定されている。清原氏の台頭をもたらした前九年合戦の伝説のほか、二六世紀の和賀・仙北合戦の軍記が伝わり、戦国時代の藤倉館跡・城屋敷跡・南郷古戦場がある。同地内の「八幡宮縁起」により、秀衡街道は南郷を経由する、衆知の道路だったことが分かる。

20 矢向峠のふもと村(山内土淵)

横手川・黒沢川の落ち合う山内土淵は古くから物産の集散地で、武道沢・大台等で採取された砂金もここに集貨された。矢向峠は上古の信仰形態を物語る旧地。後の二五世紀から南部街道の経路となる。岩瀬遺跡(日本最古の石 equal 出土)、山内遺跡(縄文時代後期の巨大墓)、鶴ヶ池塩湯神社(清原氏の氏神・塩湯彦神社の遷拝殿)、室町時代前半(推定)の和田城址、戦国時代の皿木城址、同根小屋跡・熊野神社・寺屋敷跡もある。

21 藤原秀衡奉納の弓箭(大沢)

秀衡街道の大沢以西は判別しにくい。が、秀衡街道研究会では現地調査等を重ね、それを横手川左岸のルートと推定した。道筋は回立―庭当田―大乘院塚だ。回立は旭岡山神社の元宮の鎮座地である。坂上田村麻呂の創建と伝えられるこの古社は、古代郡郷制下の山川郷の鎮守で、藤原秀衡奉納の弓箭(焼失)を神宝としていた。なお、大乘院塚は縄文時代前期の遺跡であり、ほかに三井寺遺跡・西ヶ坂遺跡もある。



旭岡山神社

23 清原氏宗家の本城(大鳥町)

秀衡街道の終点・秋田県側の起点)はどこか。秀衡街道研究会としては大鳥井柵(大鳥町)と推定した。古書に「(秀衡街道は)当初巡回之往還乎」とあって、金鉱輸送に加え、路次駅伝の機能も考えられる。右の大鳥井柵(清原氏宗家の本城)は、後三年合戦に敗れ炎上して果てた。だが後に、藤原清衡の命により復旧されている。清衡の三男・正衡は城館名を関根柵と改めて居城し、清原氏の勢力圏を鎮静させ統治したと言われている。



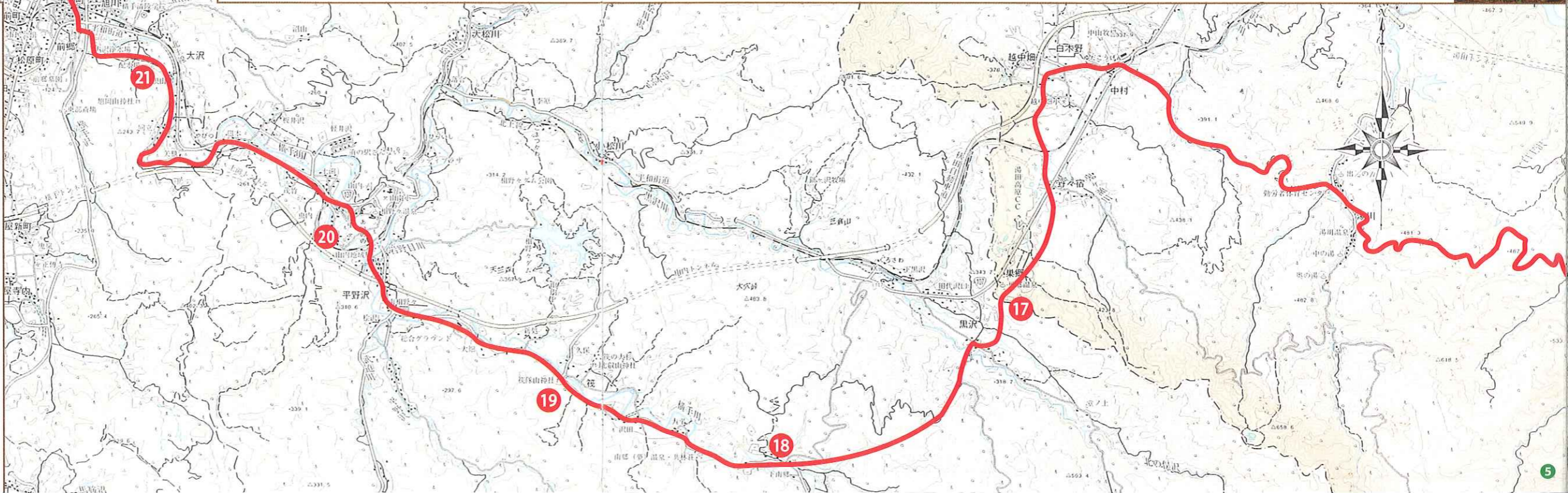
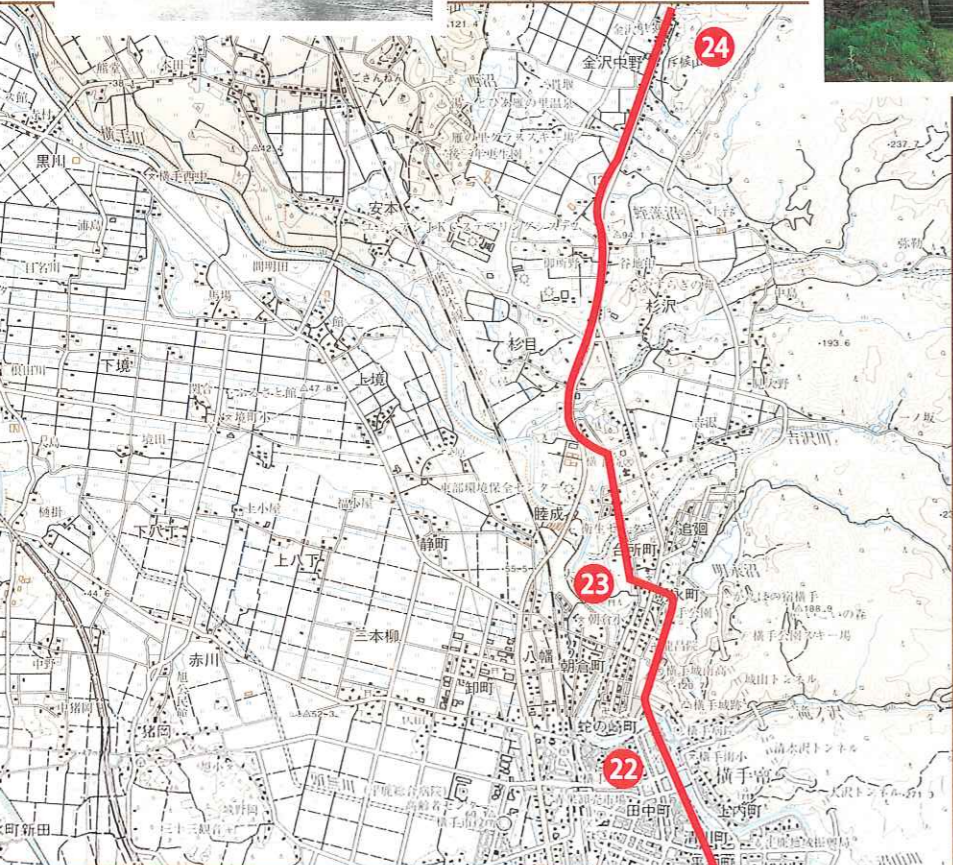
掘立柱建物跡

22 源義家を救った蛇籠(四日町、蛇ノ崎町)

実は、羽根山―大沢―本郷の経路も看過できない。羽根山に金山長者伝説が伝わり、本郷は前記・山川郷の本村に比定されていて、秀衡街道と時代的に近いから。秀衡街道研究会はこれを研究課題として残した。また、市街地を流れる横手川の蛇の崎橋付近は、秀衡街道の通過点の一つと推測される。後三年合戦の際、源義家はここで清原氏の軍兵に橋を落とされ川に転落したが、川岸の蛇籠(石を詰めた竹籠)につかまり命拾いしたといふ。



昭和4年頃の蛇の崎橋
(『写真集 思い出のアルバム横手』
無明舎刊より)



24 産金地上の要害(金沢)

終点については、金沢柵(金沢)とする見解もあり、論議の余地がある。後三年合戦の決戦場となって陥落した金沢柵は、搦手口から砂金を採取でき、産金地上に築かれた城(別称金洗城)だった。秀衡街道はそこで通じていたという推論である。だが、約10km離れた大森町では秀衡街道・秀衡橋のほか秀衡という小字名が、古来使われてきた事実もあり、秀衡街道を金沢柵あるいは大鳥井柵までと限定することへの異論もある。



金沢柵跡